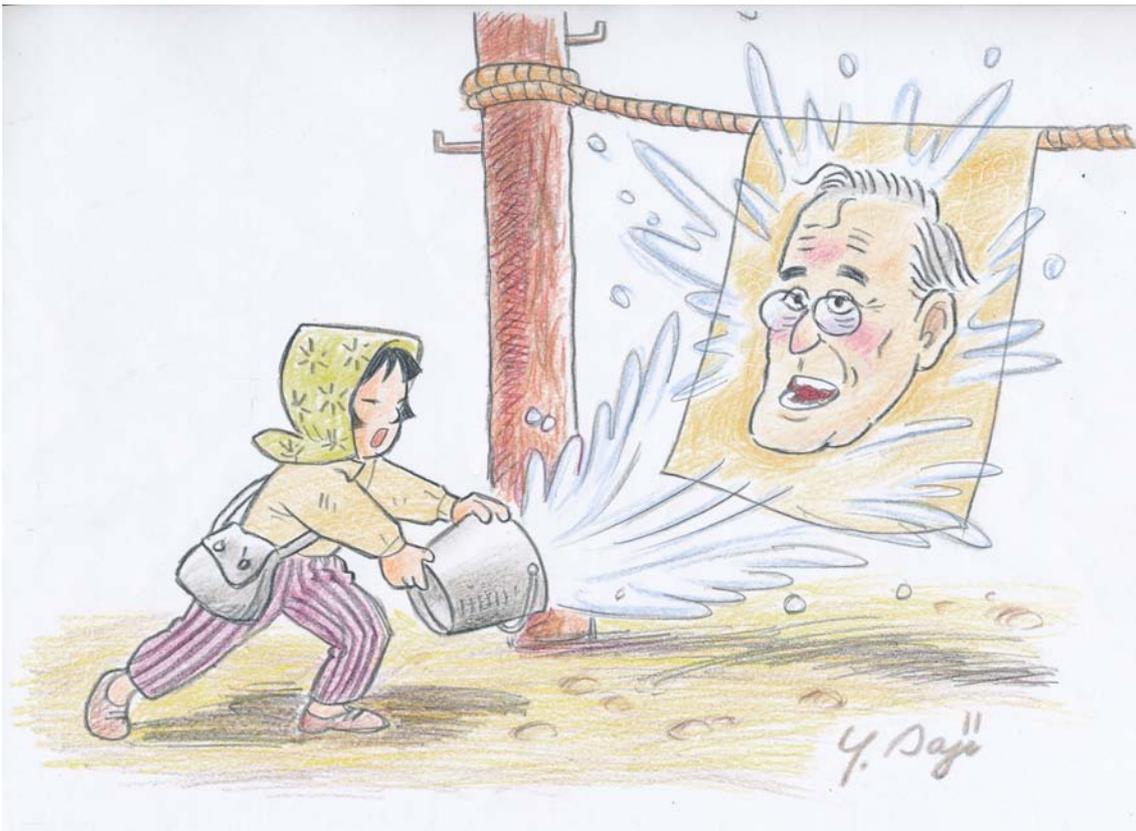


## 戦争と災害

奥田 和子

8月18日付産経新聞の『常に備えよ』の記事（編集委員 北村 理氏）は、2015年7月16日の台風11号に遭遇した三重県尾鷲市の古江地区の住民の話です。まず避難所の開設を市に申し出たのは住民の方からでした。しかも、まだ台風が高知のあたりに上陸したばかりの時期にはやばやと。避難するために支援が必要な世帯を助けるために1組5世帯の「防災隣組」の組織をつくって対応したというお話。さらに避難所に到着すると、チョンと座って弁当が配られるのを待つという流儀ではなく、各家庭から持ち込んだ食材を使って自分たちで炊き出しをして過ごしたというお話。どれもこれも実にアツパレ。「自分たちの身は自分たちで守る」という気概を絵に描いたようで心を打たれました。



ふと70年前、わたしが5才の頃の戦時下の暮らしぶりを思い出しました。戦争は悲惨でしたが、住民は知恵を絞って生き延びました。尾鷲市の古江地区の人々と同じように5軒ごとの隣組をつくっていました。“♪とんとんとんからり

んと隣組、格子を開ければ顔おなじみ、・・・♪”という陽気な歌のリズムとは裏腹に、地べたを這うような相互扶助をしました。

とり組んだのは火消しです。焼夷弾が落ちるとまたたくまに火の手があがり、命や家を焼き尽くします。そこでみなが集まって1列に並び、電柱にくくりつけたルーズベルト（敵国アメリカの大統領）の大きな似顔絵をめがけてバケツで水をぶちかまします。5才のわたしもけなげな消防士です。また、各家の戸口には、つるはしが天井からぶら下がっていました。これで燃えさかる火の手をたたき消すのです。

また、洋服の胸には住所、氏名を書いた大きな白い布を縫いつけていました。行方不明者を手早く探しだす知恵です。隣組制度は消火活動、行方不明者の捜索など住民が主人公になってすべて処理しました。

戦局が激しくなると、都会で家を焼かれた人たちはぞくぞく田舎へ逃れてきました。しかし、田舎でさえ食料が極端に不足していました。わたしは野原に出かけて草を摘みわずかな米粒とともに煮て水でうすめて分け合いました。相互扶助のかたまりのような暮らしぶりでした。戦争は備えのない人為的な災害、焼けただれるまで6年間も続きました。

いま、人々はもっぱらオンブニダッコで行政に甘えています。ノホホンと平和に酔っていてはとても災害を乗り越えられません。5軒隣組制度の復活を本気で考えてみませんか。（イラストは隣人佐治義人氏によるものです）

（2015年8月）